五　省

一、至誠に悖るなかりしか
一、言行に恥づるなかりしか
一、気力に缺くるなかりしか
一、努力に憾みなかりしか
一、不精に亘るなかりしか

五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41―2481(代)
発行人　西能正一郎

無限の精進

西能正一郎

今年も〝医療の心〟で

サービスで決まる病院の評価

あけましておめでとうございます。昭和五十九年の新年を迎え、西能病院の抱負について一言述べさせていただきます。

昨年九月八日、浜松において日本病院学会が開催され、病院を取り巻く種々の問題について三日間にわたる熱心な研修、討議が行われました。中でも学会長を務められた、聖隷浜松病院中山耕作院長の「激動する病院の光と影」と題する学会長講演は、現在の病院の持っている苦悩を如実に物語る格調の高い論旨でありまして、今もって私の心を捉え、深い感銘を受けました。

現代の病院は苦悩の中にあり、光を求めて模索しつつあるという前提の下に、今病院は、まさに暗闇に近い状態に置かれているが、この影を消すには、影のある側に光をあてること、即ち、発想の転換を図ることであり、今ひとつの方法は、あらゆるエネルギーを利用して病院自らが光を発することであると説かれました。

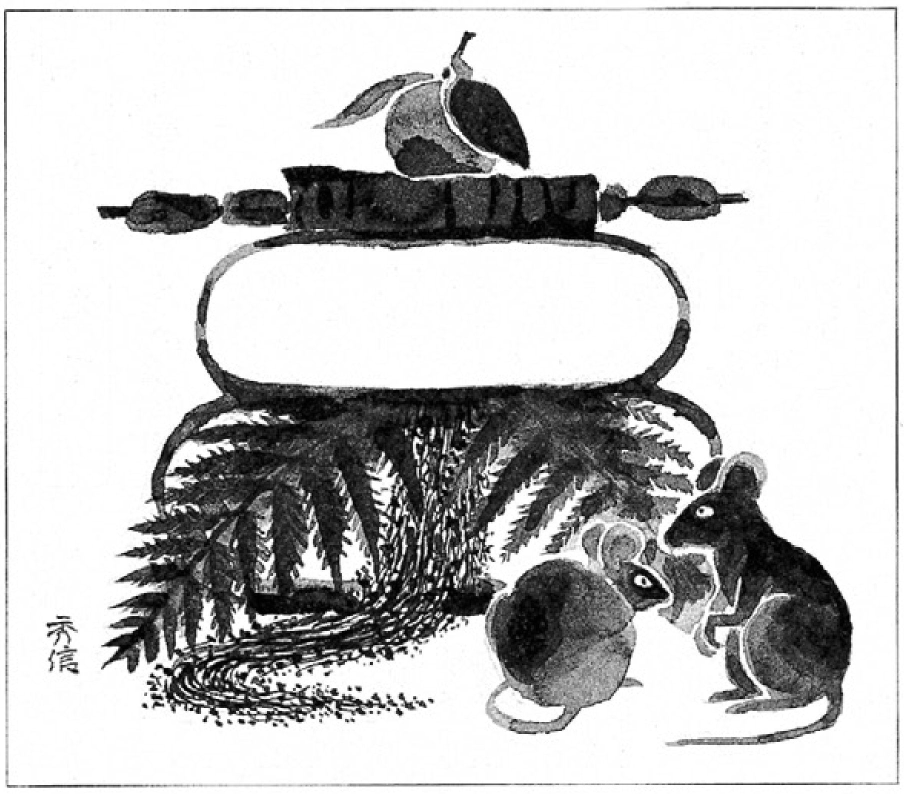
近年、医療費の高騰が叫ばれ、国民総医療費の圧縮を目的とした種々の施策が昨年来急に目立ち始めました。これは昨日今日になって急に起った問題ではなく、すでに以前からの宿命的な問題であったのであり、私共医療人や患者さん達が如何に反対しようとも絶対に避けて通ることの出来ない現実なのであります。

医療にさかれる限られた予算を、いかに合理的に使用して有効な効果を収めるかが、これからの課題であります。昨年から本格的に始まったこのテーマを、どのように解決してゆくか、今年からその第一年が始まるのであります。医療といえども経済を無視して成り立たないことは当然でありますが、又医療であるがゆえに経済を無視しても良いということもゆるされないのであります。

この相反する二つの方向とつながりを持たせ、円滑に医療をすすめることが出来るようにするものは医療の心しかないと思われます。私共は地域になくてはならない病院にしようという合言葉の下に、この二十一年間努力して参りました。

昨年は皆様のお陰によって新病院を開設することも出来、順調な滑り出しを始めさせていただいております。病院のハード部門は今の所、とりあえず所期の目的を果し得る機能をもっている病院として評価していただけると思っております。ソフト面、病院で働かせていただいている職員一同が、果して患者さんのご要望に応え得る働きをしているかどうかを今一度見直すことが今年まずやらねばならない事であると思っております。

病院の機能の良し悪しは、病院の設備や、機械器具によってのみ評価されるものでもなし、医療にどの程度お金をかけるかによって決められるものでもありません。むしろ、そこに居る人の無形の医療サービスが、いかに的確に行われるか、病める人の心がどのように慰められるかによってほとんど決まるのであります。それはお金のかかるものでもないのです。私共はこの無限の精進を今年の目標にしてゆきます。



え　と　文

大島秀信

ゆらゆら映るカマドの火

庭先にあるセイロから昇る湯気が白い雪の中に光る外はまだ暗い　大きな臼に打ちおろす杵の音があたりに響く　家々には灯が点　点とともる　薪をもしたカマドの火がゆらゆらと顔にうつる　朝になっても近所は餅つきだ

「あんたとこいくつ、つくがけ」と向いの奥さんが玄関の柱に手をかけながらのぞきこむ　「おらとこけおらとこは六ツだちゃ」と父が餅をつきながらとぎれとぎれにいった　向いの奥さんが「おっじゃ、いっぱいだぜ」と冗談ぽく笑顔でいった

今はめったにみられない餅つき風景を私は子供の頃をなつかしく思い出すのです

（日展特選二回、富山県日本画家連盟委員長、富山県美術連合会理事）

住　栄作氏

医療法人、財団五省会西能病院理事、住栄作氏は、十二月十八日行われた総選挙で、富山県一区から出馬、八万七千八十三票を獲得、五期連続の栄冠を果たした。住氏は「病院や病院関係のみなさんのご声援有難うございました。富山県のため国政のため頑張ります」と決意をのべている。

西能病院は、全職員をあげて応援、西能院長は富山地区の選対事務長をつとめた。十一日には選挙事務所で、病院職員百人が集まって決起大会を開いた。十六日、富山市体育館で開いた総決起大会に山本玲子看護部長が、婦人代表で激励のあいさつをした。

あすなろ

子(ね)年の初春。十二支の最初にあてられ、尊ばれる。白ネズミは大黒様のお使いで吉兆とされている。正月三が日の間、ネズミのことを〝嫁が君〟と呼ぶ。よめご、よめごせ、よめじょなどと呼ぶ地方もある。飯や米粒、正月餅をお供えする▼ところで、家ネズミが、めっきり減ったようだ。新建材などで住みにくくなったのかもしれない。昔は屋根裏でバタバタうるさいかと思えば、チョロチョロ現われ、キョトンとすましているひょうきんな姿も見られた▼私たちは子供のころ（昭和初期）いろいろな動物と遊んだものだ。ネズミに指をかまれた。犬やヘビにもかまれた。ネコにひっかかれ、鶏につつかれ、ハチにさされ、カニにはさまれた。今の子供たちは外で動物たちと遊ぶことがない。動物たちも少なくなった▼ネコまでが過保護になり、ネズミをとることを忘れてしまった。ネズミを見ても横を向いているそうな。小さい時から親元を離れ、人間ペットになっているので、伝統の訓練を受けていない。ここは天下泰平▼徳川時代に鼠小僧次郎吉という盗賊がいた。大名屋敷が専門、盗んだ金を貧民にばらまき、義賊と市井にうたわれた。歳月が流れて百五十年、現世大名気取りの〝頭の黒いネズミ〟がはびこる。でるか、取っちめる鼠が……。

三宝に登りて追われ嫁が君（虚子）

新年明けましておめでとうございます

昭和59年

医療法人 財団五省会

理事長	西能正一郎
常務理事	林　敏彦
理事	住　栄作
理事	米田寿吉
理事	岸口　繁
理事	西能綾子
監事	石川　実
監事	筧田英二
評議員	稲垣忠一
評議員	尾山征一郎
評議員	重松　尚
評議員	神沢幹夫
評議員	西能　孜
評議員	西能　竑
評議員	坂本重一
評議員	土田亮一
評議員	豊田文一
評議員	古沢富美
評議員	堀　政夫
評議員	松井元太郎

健康法の問題 (19)

矢野三郎

“ぬる湯”が神経疲労に効き目

日本人は昔から風呂好きだといわれている。とくに冬になると、熱いお風呂に入って体をあたためようと思う人が多い。風呂に入ると血液の循環が良くなり、体があたたかくなるだけでなく、精神的、心理的な効果もあり、お湯につかるのは実に気持の良いものである。入浴というものは本来、体を清潔にするのが第一の目的であり、体をあたためたり、気分を良くするというのは二の次の問題であるが、日本では入浴がレクリエーションであったり、健康法であったりしている。「入浴健康法」という本も出版されているくらいである。

入浴は体にいろいろな影響を与えるが、これはお湯の温度と密接な関係をもっている。「江戸っ子のあつ湯」ということばがあるが、若い元気な江戸っ子は、やっと入れるような熱いお湯につかって、仕事にとび出すという。若い人ならこれも悪くないが、高年者や血圧の高い人にとって、あつ湯は危険である。四十三度以上のお湯に入ると、血圧が上り、脳卒中をおこすおそれがある。体をあたためるために入浴するのも、ほどほどにしなければならない。熱いお湯は体を刺激し、交感神経系の興奮がたかまる。体の代謝もさかんになり、エネルギーも消費される。一回の入浴で、ちょうど二〇〇〇メートルほど走るほどのカロリーが消費される。

すなわち、入浴には運動と同じ効果があるわけで、脈も早くなり、入浴後には疲労も残る。そこで、ジョギングの時に脈の早さに気をつけなければならないのと同じように、入浴の場合でも、脈が早くなって、ドキドキするほど、熱い湯に長くつかるのは健康上、好ましくない。

熱い湯が体に刺激的に作用するのとは反対に、ぬる湯には神経を休める作用がある。労働者の調査によると、最近のサラリーマンは神経疲労が身体疲労を上まわっているということであるが、一日の神経疲労をとるには、ぬる湯にゆっくりとつかるのが何よりの健康法であろう。

入浴中は体があたたまっているが、風呂場をでてからの湯ざめに注意しなければならない。近頃は家の中の暖房が完備しているので、昔ほど、湯ざめの心配もなくなったが、風呂をでて暫くすると、足の先が冷たくなっていることも少なくない。お風呂をでる時に、冷たい水を足にかけると良いといわれているが、短時間の効果に過ぎず、これだけでは安心できない。

入浴健康法といえば、日本では温泉の利用がさかんである。しかし、温泉の成分に関する化学的研究は別として、温泉の成分が医学的にどのような作用をもっているのかということになると、ほとんど分っていない。すなわち、「温泉浴」と「温水浴」の違いがはっきりしないのである。ただ、温泉には各種の金属イオンなど、塩分が溶けこんでおり、これが体に何らかの働きをしていると予想されている。

昔から「さら湯は身の毒」ということわざがあるけれども、新しい真水のお湯が体に毒であれば、塩分などが溶けているお湯は体に良いといえるのかもしれない。もともと塩分が適当に溶けているお湯は、皮膚の代謝を刺激しないし、また浴後の湯ざめも少ないと思うが、これだけで、温泉の効用を説明するのはむずかしい。

（富山医科薬科大学・教授）

新しい年を迎えて

入院患者さんの感想

出合いを大切に

昨今の世相を見るにつけ、私欲の虜となり濁悪の人心の乱れに、過し日に読んだ仏典「蔵の財より身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり」の一節に思いを馳せ、当院の尊敬すべき諸先生と心情豊かな職員の方々に巡り合えた事を。

「袖ふれ合うも他生の縁」の諺の如く、長い人生の旅路にこの心暖まる人々との出合いを私は大事にしたい。年始に当り、私の胸中深く秘しておく事を。

（奥平善次）

大地を踏む日の……

一九八四年は、私の生涯にとって記念すべき、希望あふれる画期的な新年である。

健やかな二つの脚に
て大地踏む日のあり
やなし杖頼り行く

昨年七月、両股関節変形、激痛のため、杖なくして一歩も歩けない状態であった私は、それでも、日常生活を続けるつもりでいた。

手術受くる否やは人生
観の問題と医師は促す
耐へゐる我を

院長先生から懇切なるお奨めをいただき、人工股関節置換術を受けることを決意した。左脚九月五日、右脚十一月七日、副院長先生の英国方式の手術を受け、順調な経過をたどり、熱心なリハビリの先生のお蔭で、筋力も回復しつつある。

まがひなくわが身の
うちに納まりて人工
股関節脚に馴染みぬ

すでにわが骨となった人工股関節の、嘘のように痛みの失せた脚で大地を歩む新年である。

（矢野紀美）

一日も早くわが家へ

昨年は二回入院しました。一回は骨せつで一ヵ月間、退院後二ヵ月でまた入院。その間、先生、看護婦さんには、大変心配をかけ、皆様のお力で歩けるようになり、喜びの毎日です。今は、ただ一日も早く退院し、田園の中のわが家、家族（愛するだんな様の下へ）と一諸にくらしたいと、節に節に希望しています。

（大門好恵）

幸福への道

私は入院後、数ヵ月すぎているが、もっと長い人たちがいる。私は、それ相応の決意して、身の仕末ができるよう訓練している。

「医者上手に、かかり下手」という諺がある。名医の診察を受けても患者がいいつけを守らなければ、治療の効果がない。一生懸命に訓練を受け早く先輩のようになりたい。それこそ幸福である。

（熊木光男）

助け合って

昨年十月末、両足の怪我で入院して以来、先生、看護婦さん同窓の患者さん達の心温まる介抱、励まし等で精進して迎える正月も格別の味がします。とうとう西能ファミリーの一員となりました。

これからは、思いやりのある家族として助け合い、一日も早く回復する様に努力しようではありませんか!!84年は皆様の意義のある年であるよう願っております。

（尾久善憲）

漂う人情味

病室から眺望した立山連峰、日の昇る前の空が朱に染って行く荘厳な美しさに身が引き締まる思いがします。

人間の世界にこのような情景を望むべきもありませんが、西能病院に漂っているヒューマニティーは、これに近い社会のように思えてきました。頂点に院長がいて、職員が中腹からふもとをしっかり支えている、というのが私の卒直な感慨です。日本の医療全体がこのようにあればと念願してやみません。

（金子克己）

わたしはこう思う

〈20〉

はじめに

医療現場での反省もこめた対談シリーズ、今回はその二回目。外科医としてメスを振るった回数は全国で三本の指に入るといわれる村田先生が、臨終に立ち会う医師こそ偉い人だと述べておられるのが印象的だ。これをうけて西能院長は、同病院で実践しているありのままを披露、医師としてタブー視されがちな臨終に立ち会う医師の心をめぐって話がはずむ。患者に誠心誠意、全力を尽くしたからこそ、淡々と語れるのであろう。

病院サービス②

20年間、臨終に立会う　村田先生
玄関まで遺体を見送る　西能先生

―対談―

県立中央病院名誉院長　村田勇先生 × 西能病院院長　西能正一郎先生

村田　そういえば、昔は手術室へ家族を呼んだものです。患者から切除したものを見せて、こんなに大きいのがありましたよ、これはこうなんですよと、その場で説明したなあ。いまはそんなことはない。家族を手術室へ入れないからね。

別室で、いまから説明がありますから、家族は集まりなさいと、ちょうど記者会見といっしょだ。もちろん、切除したものは持ってきて親切に説明をしますがね。

しかし、なんちゅうかな、そこには非常に冷たさがあるんでしょうな。家族にすれば、肉身の切除されたものを手でさわってみてね、その手に血がついてね、そこで手を洗うとかね。そのほうが医者と患者・家族のコミュニケーションがじかに伝わるように思うな。

西能　昔のほうが臨場感があったわけですね。

村田　そう。ぼくが驚いたのは、もう随分以前のことですが、ある病院へいってね、こんなことがあったな。

その患者は今晩死ぬことは察しがつくんですが、院長がやってきて“もうダメです、ダメです。お別れです”と家族にいってさっさと帰っていくんですよ。まだ患者は生きているんですよ。これからそんな医者が多くなってくるかもしれん。

臨終に立ち会うとき

―ドクターが受持ちの患者の臨終に立ち会う心境は大変なものでしょうね。

村田　冗談のようになるかもしれませんがね、かつては患者が臨終のときは医者は必ず立ち会ったものですよ。つらくて一杯飲んでいったこともあるけど……。最近の医者はあまりいかないのじゃないかな。ダメになったら電話で知らせてくれと看護婦などに頼んで…。

病院と自宅が隔れていると、夜間は当直の医者に頼んだり、段々そんなふうになってきていることだけは間違いないな。だから、臨終のときは、それだけコミュニケーションがなくなる。

西能　私のところは、そんなことはないんですけれど……。

村田　え丶、先生のところのような私的病院には、まだかつてのよいものが残っていますね。

西能　私のところは、患者がダメになるなと思っても、家族がくるまで一分一秒でももたせようということでね。とにかく患者が生きているうちに家族に会わせるのが目標です。

私どもの病院は、県中のような大病院と違って、病院で亡くなる人は年に五、六人でしょう。ですから、亡くなられるときは必ず主治医が付きますし、亡くなられてからでも私がかけつけて、とりあえず最終的に宣告するというふうにしています。それで迎えの車がきますね。そこで遺体とご家族を病院の玄関先までお送りするところまでが主治医の仕事です。

臨終と医師の心

村田　それはいい話ですね。病院の心づかいがよく察せられます。

あの—、ぼくは患者孝行の村田先生といわれたことがあるんです。

とにかく、自分が手術した患者が亡くなるとき、必ず見にいったんです。家が病院と近かったせいもあるが、真夜中でもいつでも行きました。家族に会って、できる限り努力したけれども……とあいさつした。医者としてというより人間としての気持ちの問題です。いま先生のおっしゃったように玄関に送りだすまで主治医が付いている、そこですよ。

ぼくはもちろん主治医ではなく、外科医長でした。主治医も当直医もいるんだけれども、ぼくは必ずいった。二十年間、こんなことが続きました。別に偉いとかどうのという意味でいっているんじゃないんです。これが医者の気持ちであり、常識だと思うんですよ。

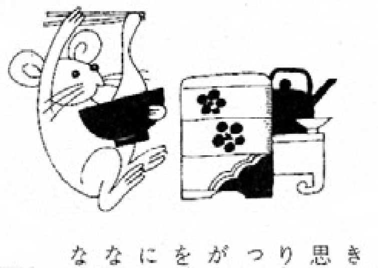
西能　いま先生におほめをいただきましたが、実は私、そうしていることは、ひょっとすると私どもの防衛手段かもしれないと思うこともあるんです。

整形外科病院で患者さんが亡くなられるということは、実際にはないはずの話なんです。にもかかわらず亡くなられたとなると、家族はなにかふっきれない思いで帰られる。そこをなんとか私たちがやれるだけのことをしたと十分理解していただきたいとの思いもあります。

人間は神様と違って百%ではない。あとで反省してみますとね、あのときはこの方法しかないと思ってやったのに、やはりもっとこうすればよかったんじゃないかと迷いが起きます。そんな自分を慰さめ納得させるためにも、ちゃんとしておかないと私自身もふっきれないわけですよ。

臨終の立会い避けがち

家族も患者の痛みに無頓着



偉い医者とは

患者の臨終と死にかかわる医師の気持ちがわかるようです。結局は医師の心の問題になりましょうか。

西能　そう、心もさることながら、自分は神様でないという立場に立ちますとね、やはり一人の命が亡くなったことに対する責任を考えなければなりません。その責任というものを、やけ酒でまぎらわせるのか、或いはお見送りすることでまぎらわすのか、そのような心境なんですね。決して立派ではないんです。

村田　まあしかし、医者というものは、人が死んでいくときはね、やっぱり看取ってあげなきゃいけないな。そこが大事なところだと思うよ。患者が死んでいくとき、ベッドサイドにいて看取らにゃいかん。亡くなってからでもいい、見にいかにゃいかん。これが医師として一番大事なことでしょう。

たとえ、どういういい医者であろうが悪い医者であろうが、それができる医者は一番偉い医者だと、ぼくは思うね。

先生のおっしゃるように、あの診療はどうであったかということより、自分は神様じゃないんだから、完全なことはできなかったかもしれないが、尽くすだけは尽くしたということだろうと思うんだな。

まあ、えてして患者の調子がよいときはよく訪れるんですよね、医者というものは。とくに外科医者は手術して結果がよいとね、何回も何回もいくんです。ところが結果が思わしくないと、その患者のいる病室に入るのがいやになってくるもんです。ついその病室を素通りしてしまう。それでも気になっているから、看護婦に“あの患者はどうか。相変わらずか。頼むぞ”と……。

本当はそんなときほど顔をみにいくようにしないといかんのだがね。

西能　医者を職業に選んだものの宿命を感じますね。そうしたものに打ち勝つ勇気がなければ、初めから医者にならないほうがよいですね。

村田　そのとおり。あ丶、それから患者の家族のほうにも問題があるように思うな。昔は付添いの家族が患者の苦しむのを見かねて、どうせダメならもう注射などをやめてくださいと……。ところが、最近はそれがなくなりました。例のカレンさんのような特殊な例は別としてね。

つまり、家族は身内の患者がどれほど苦しんでいるのか、いまどんな状態になっているのか知らないわけ。患者を見にくる暇もないのだろうけど、息を引きとったら知らせてくださいという感じね。医師と家族、患者と家族のコミュニケーションは、今後ますます薄らいでいくように感ずるんだな。

（つづく）

ハリ治療（下）

これだけ進歩した現代医学の時代にあって、世界的になぜ今ハリ治療をするのか。ハリ、灸は主として人体を対象とした経験的医学として、伝承され、東洋哲学的に意味づけられ実証されてきた、一つの治療体系であります。

しかし、あまりにも特異なため自然科学者からは、理解出来ない体系であったがため、科学的に証明出来ませんでした。だから近代医学の場にハリ治療は取り入れられなかったのです。

身体機能の全般的調整に

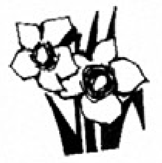
注目集めた米記者のハリ麻酔体験記

ところが、ニクソン訪中時、アメリカのレストン記者のハリ麻酔体験記が、新聞に報告されて以来、中国のハリ麻酔は、東洋の不思議な医療として、一躍全世界の注目を集めました。（薬を使わずに、手術に適応出来るだけの麻酔がかかることは、今迄の常識では考えられない事なのですから）

このハリ麻酔の真実性が認められてから、にわかに医学研究の対象としてとり上げられるとともに、その他のハリ治療効果も見直されることとなったのです。

近代医学の観点からはハリの作用は、身体機能の全般的調整であり、免疫の賦活、身体抵抗の増強、抗炎症的、鎮痛的、抗アレルギー的、抗ショック的、抗麻痺的な作用を有する事が、証明されるに至り、今日治療に広く使われています。

（西能病院ハリ治療室　川口知明）



ねんりん ⑳

西能病院のあゆみ

思い出を語る〈12〉

司会　第二回目の座談会を開きます。第一回目は、昭和三十七年三月、富山市星井町に西能整形外科医院を開いてから昭和三十九年までの三年間にわたる苦難から多忙時代の思い出に花が咲きました。第二回目は、昭和四十年から、病院増築を中心にして話を進めていきたいと思います。

本当の姿を

院長　西能病院は、私一人の力でできた病院ではなく、皆さんの協力でできた病院であります。皆さんにはそれぞれそれ忘れられない思い出があることでしょう。それが本当の“ねんりん”ではないかと思います。皆さんから見たとき、私が頭を抱えるような話も飛び出すと思います。そういうことで、本当の西能病院の姿を出していただきたいと思います。

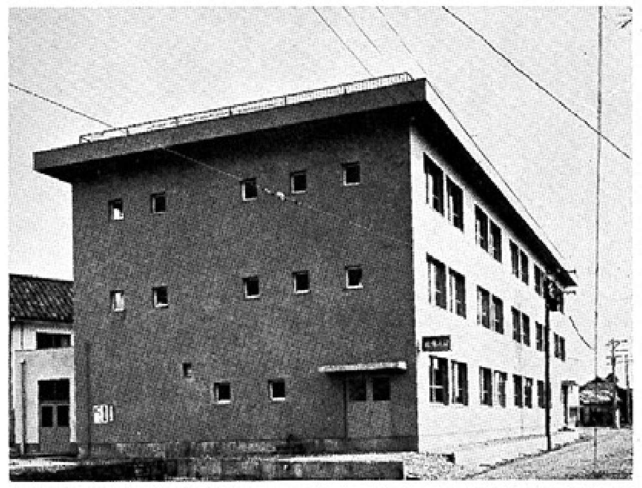
司会　昭和四十年四月に、病院第一期増築工事の鉄筋三階建て（二十七室七十七床）が完成しましたが、院長から経過などについて……。

隠して四千万円調達

院長　五福に木造の病院を開設（昭和三十八年）したときから計画に入れていましたが、予想以上に患者さんが増えたので増築の決心がつきました。二カ所（星井町の医院と五福の病院）に分れて、いい医療ができないことや、星井町の明け渡しが迫っていたこともありました。

さて、資金面が不十分だったので北銀の林さん（現西能病院常務理事）に相談したら、「あなたの貸し付け限度額は二千五百万円です」と、いわれました。ところが、三階建ての設計では、医療機器などの設備を含めて四千万かかります。二千五百万円では二階までしか建ちません。どうしても三階建てにしたかたったので、林さんに隠して四千万円を調達しました。（笑い）

ゆったりと一新した待合ホール



病院第一期増築工事は昭和四十年四月に完成

司会　星井町の幽霊屋敷から、五福のどっしりした鉄筋建てに移るときの喜びや、竣工式の感激などについてお聞かせ下さい。

一同　やっぱり、こんなきれいなところで働けて嬉しいーという気持ちでいっぱいでした。

嬉しかった機能完備

堀　二カ所に分散した管理は大変でした。それが、ようやく一カ所にまとまり、五十人の職員を抱える病院（鉄筋七十七床、木造四十七床）としての機能が完全になったのが一番嬉しかったですね。とくにバタバタだった手術室やレントゲン室など医療機器の設備が整ったので胸をなでおろしました。内輪だけの、ささやかな竣工式でしたが、奥さんが一人で喜びをかみしめておられました。なにしろ、火の車のやりくりに苦労されましたから……。

司会　三日市さん（旧性江尻）には、東京からわざわざご苦労さんでした。

わかる母親の気持ち

三日市　竣工式に福野からお見えになったご両親の対照的な姿が印象に残っています。お父さまは、晴れやかなお顔で誇らしげに挨拶されました。お母さまは、もう一つ心配というお顔をしていらっしゃいました。私は二児の母親になりましたが、あのときのお母さまの気持ちが、なんとかわかるようになりました。

感激のもらい泣き

鎧　院長が「自分の建て物だと思って可愛がってくれ」といわれた“感激の涙”が胸にきざみついています。

津田　院長は、話されるやいなや泣かれました。そしたら職員もずらずらみんなして“ワーワー”もらい泣きしました。あのときみたいに感激したことなかったですね。星井町のぼろっちいところから新しいところに入って嬉しかったのです。

院長　亡くなったおやじが喜んでくれました。当時の鉄筋建てが嬉しく涙で声がつまり、しゃべれなかったです。男として一人前の仕事をしたという気持ちと、これからが大変だの責任感が涌いてきました。

◇　◇　◇

（つづく）

出席者（紙上参加を含む）
△元勤務者＝開発正子、三日市久子、竹腰美奈子、池田千佳子
△現勤務者＝津田勝美、川西信子、広長百合子、鎧貢、伏木峯子、米田絹代、寺崎民子、津田美智子、井上千恵子、森田由紀
△西能正一郎（院長）西能竑（副院長）堀政夫（顧問）古沢富美（顧問）
△司会＝中島曠（総務部長）石倉喜一（サービス担当）＝敬称略＝

今こそ、地力を発揮しよう

あけましておめでとうございます。昭和五十九年の新春を迎え、西能病院は、力強く〝ねんりん〟を刻みこみました。昨年は名実共に新病院としての機能を発揮する準備を完了、〝信頼と奉仕〟をモットーに職員一同、心を一つにして、安定したよい病院づくりにつとめてきました。新春の決意、抱負を西能院長はじめ各部長はつぎのように語っています。

「今年から、今まで私共が培ってきた努力が実る時期、成果を問う時期になりました。医療の世界は、これからますます厳しく、つらくなるでしょう。しかし、西能病院われら一族は、困難が強ければ強いほど、一層団結して、いかなる困難もはね返す実力を持っております。おそらく、つらい年になりましょうが、今こそ地力を発揮して、地域になくてはならない病院としての評価を受けられる努力を続けることを約束しましょう。それが、われわれの明日を約束してくれるものと信じます」**（西能院長）**

責任ある医療の自覚を

昨年は、病院の増改築工事も順調に完成し、当院の診療体制も設備もどうにか軌道に乗って進んでおります。

本年は、この新たなる設備のもとで診療部一同、力を合せて内容の高い医療をめざして努力する方針であります。患者さんに信頼される医療、思いやりの医療は、医療の原点であり、当然これからも当院の診療の基本としてさらに前進しなければなりません。

さらに本年の重大な目標は、医局をはじめとして、職員の医療知識の高揚と責任ある医療の自覚を目指し、内外の研修活動を強化し、患者さんが安心して治療を受けられるように努力する重要な一年と考えております。

（副院長兼診療部長　西能　竑）

質の高いサービスで

医療の側面を支えるリハビリテーション部、X線検査、ソーシャルワーカよりなる当パラメディカル部には、新年だからといって遠大な目標はありません。それよりも足元の一歩一歩を大切にし、患者さんのニードに合った、患者さんと心の通い合った医療を行ないたいと思っております。

特に、リハビリテーション部では県内医療機関最多の四人と、理学療法士が増員され、本年は今まで以上に質の高いサービスが提供できるものと思っております。

（パラメディカル部長代理　吉岡　勉）

病院精神を理解して

子供のころは、〝早くこい、こい、お正月〟と楽しみにしていたものですが、近頃は、また齢（よわい）を重ねるのかと、ゆううつになることもありました。

西能病院に俸職して、なんとか百日を経過し、新しい年を迎えました。今年は干支（かんし）を数える最初の子（ね）年でもあります。心を新たにし、西能病院スピリットを理解して皆さんと一緒に地域医療のために頑張りたいと思います。

（薬剤部長　永沢昭二）

勉強する年に

今年は医療を取りまく環境が昨年以上に厳しい年になることは間違いありません。

今までの病院は、社会から手厚い保護を受けてまいりました。もう、そのような時代は過ぎ去ってしまいました。過去のような甘い考えは脱ぎ捨てて自分達の力で公益性を高め、そして患者さんに喜ばれる病院にしなければ生き残ることは出来ません。

今年は、職員の皆さんと共に昨年以上に勉強する年になると思います。お互に健康に気をつけて頑張りましょう。

（総務部長　中島　曠）

職場の活性化を

昨年は病院の増改築、そして許可ベッド一八五床に伴う看護職員の増員対策にと多忙に過ぎました。今年は職場の活性化と看護職員の資質の向上に着目したい。

蒔絵のお重のおからにならないよう、プロ意識の自覚と自己研鑽意欲の高揚に努力を重ねて行きたいと思います。

看護は多くの皆さま方との出合いによって育てられていくものだと思っております。今後共、よろしく御指導、御鞭撻をお願い致します。

（看護部長　山本玲子）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

美しいものが見えてきた

〈第十八信〉

松下英勝

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

自分が富山で皆さまにお世話になったときは、車イスでかけ回っていました。それも、つい先日のような気がし、やっぱり月日の歩みの早さを思います。

昭和五十八年の最後の手紙として、姫路へ帰ってからの近況をお知らせします。（松下さんは十月五日から十二日まで西能病院で入院療養）

「愛光園社会見学」の名目で、リフト付き大型バスに乗って園生一同、兵庫県加西郡東条湖ランドという遊園地へ遠足に行きました。バスの車中で、バスガイドさんが、ジェットコースターは世界一で、ギネスブックに認定されていることや、観らん車は、世界一の高さの神戸のポートアイランドについで二番目の高さと聞きました。

〝運命共同体〟のジェットコースター

高所恐怖症の自分は、最初から乗る気なぞなかったのですが、（よし、それなら世界一を乗り極めてみよう！）という気になりました。決心すると、乗るまでの困難は苦でも何でもありません。

早柏先生、八十キロを何なく背負ってくれて、「松下さん乗りましょう」と、横に同席してくれます。

この体になって、首の骨を折って…。元気なときに怖くて乗れなかったジェットコースターに乗れるとは…。

「乗る人にご注意！首の骨、背骨を痛めている方、高血圧などの方はご遠慮下さい」と、書いてあるにかかわらず…。

早柏先生と無事に降りてきてから「運命共同体」という言葉を頭に思い浮かべました。一緒に乗った見知らぬ女性達も共に恐怖を味わって他人の気がしませんでした。観らん車にも乗りました。

自分は最近、障害者であることを忘れそうになります。〝こだわり〟がとれ、色々な経験を重ねるうち、眼の中のウロコが一枚一枚ずつはがれる思いがします。ジェットコースターの何十秒かの間、ほんの僅かの一瞬にずい分たくさんのことが走馬灯の如くあっという間に去来しました。はっきり覚えていますが、それは省略します。

NHKの「車椅子フルマラソン」をみました。でも今の自分たちの生活の中には存在しません。参加者の涙ぐましい努力は決して否定しません）

自分は、今までの悔し涙は涙のまま終らせました。今は涙すらエネルギー源にし、何物にも負けず強く生きます。

自分の生活には、セレモニーもなければ、パトンガールの華やかさ、美しいフィナレーもなく、こっけいにコケティッシュに生きています。

五十八年はずい分お世話になりました。五十九年も、よろしくお願いします。**（姫路市打越一一〇〇重度身体障害者授産施設、愛光園）**

迎　　春

本年もよろしくお願い申し上げます

医療法人　財団五省会　西能病院職員一同

青木　茂
穴倉　栄
荒井　紀夫
荒井　三津子
新川　弘美
石倉　喜一
一島　洋美
伊藤　勝仁
井上　千恵子
今井　礼子
岩城　真由美
石井　勉
池本　雅二
梅原　育代
江尻　栄子
老田　奉夫
大浦　春美
大島　佐登美
奥平　美和子
各川　静子
小幡　英子
大久保　明子
片岡　美代子
金谷　智恵子
川口　知明
川西　信子
加藤　和枝
北井　ひとみ
北野　佳代
木下　春美
木下　文雄
北浦　純子
久世　智保子
九里　淳子
西能　正一郎
西能　竑
西能　綾子
坂田　隆夫
上不　雅子
杉村　洋
鷲見　信清
杉谷　清美

関　待子
滝　ゆかり
田上　慶子
高村　美和子
竹林　一子
竹丸　道夫
多胡　悦子
田中　行久
谷　英美子
谷川　美和子
谷野　ノブ子
田畑　朱美
高谷　昭子
塚原　博子
津田　勝美
津田　美智子
恒田　喜代美
坪内　奈津子
経沢　庄一
寺崎　民子
塘添　誠次
飛田　勉
土山　隆子
中島　曠
中山　栄子
永澤　昭二
中島　和子
錦戸　直美
橋本　秀輝
服部　真知子
浜谷　佐香子
早崎　智美
浜田　琴恵
林　美由紀
広長　百合子
平野　典和
伏木　峯子
藤沢　伸江
二口　雅子
船木　芳美
古井　良洋
堀井　富美子

堀部　佳恵
堀尾　貴代美
前田　静香
松田　伊佐子
松永　幸恵
丸山　宗治
水口　洋子
水島　敏子
三ツ松　節男
三原　美樹雄
三原　八重子
宮尾　英新
宮本　直美
宮原　佳子
村井　悟
桃井　玲子
守内　弘義
森川　渥子
森田　由紀
森田　吉典
安井　好子
安川　敏一
安川　みどり
安田　十四子
山口　明江
山崎　真由美
山本　玲子
山崎　弘
山本　英子
用水　とも子
吉岡　勉
吉崎　秋子
吉崎　智
吉田　範子
吉田　美喜子
吉村　靖
吉本　和子
鎧　政行
鎧　貢

（以上、百二十三人、五十音順、昭和五十八年十二月末現在です）